佳作

日記

青森県八戸市立鮫中学校
３年　竹駒　結月

私には、中学校の入学式の日から続けていることがある。それは日記を書くことだ。母に入学を機に勧められて始めることにした。正直面倒だと感じたが、なにかを始めるには良い機会だと思い今も続けている。これまで一度も読み返したことはなかったが、この３年生の夏休みに日記を読み返してみることにした。日記の１ページ目には、入学式で緊張したことや、これから始まる学校生活への期待がつづられていた。ページをどんどんめくっていくと、「疲れた」という言葉が１週間続いている日もあれば、思いがあふれて書ききれなくなっている日もあった。読み返してみると、そういえばこんな日もあったな、と懐かしく感じた。

その日記の中で、去年の５月から７月までの３カ月間、ある一つの出来事が中心になって書かれていた。それは、私の大好きな祖母が病気になったことだった。

祖母とは、私が小さな頃から、多くの時間を共に過ごしてきた。

私の家は母子家庭で、母の帰りが遅い日は学校が終わると、近くに住む祖母の家に帰っていた。祖母はいつも「ゆっちゃんお帰り。今日の学校どうだった。」と笑顔で迎えてくれた。そして、私の学校での出来事を飽きる様子もなく、いつもうれしそうに聞いてくれた。10 年前に祖父を亡くしてから一人暮らしの祖母は、私と話すことが唯一の楽しみだとよく口にした。私も祖母とのそんな時間が、とても楽しかった。

祖母は、小さい頃から私をいろいろな場所に連れていってくれた。お祭りや遊園地、海では一緒に貝がらを拾い、砂浜に絵を描いた。隊員２名の「鮫町探検隊」をつくり、ひまさえあれば探検という名の散歩をした。母や友人に話せないような悩みも、祖母になら素直に打ち明けられる。祖母は私にとって、とても特別な存在だ。「腰やお腹のあたりが痛むんだよね。」と口にするようになった祖母の病気が発覚したのは、５月のことだった。70 を過ぎた祖母は、これまで大きな病気をしたこともなく毎日元気に過ごしていた。散歩や庭の手入れが趣味の祖母のことだから、少し動き過ぎたのではないかとあまり気にしていなかった。しかし、しばらくしても痛みがひかないため病院で検査をしたところ、胆のうの病気であることが判明した。高齢のため少なからずリスクはあるものの、幸いにも手術を受ければ良くなるとのことだった。私はひと安心した

が、連日の検査や食事制限などでひと回り小さくなった祖母が手術に耐えられるか、不安も感じていた。

６月、祖母の手術の日が決まった。その日は、私の学校で７月に行われる合唱コンクールの日だった。母は手術の付き添いのため仕事の休みをとっており、手術が終わったら合唱コンクールを見に来ると言っていた。何も起きなければ十分に間に合う時間だから、と。

７月 20 日、合唱コンクールの日。１年生のステージが終わり、私たちのクラスの番が近づいてきた。私は母がどこにいるのかと体育館を見渡した。手術が成功したら、母は私に見えるように手で小さく丸をつくって合図すると約束していたからだ。しかし、母の姿は見当たらない。ステージに上がり、もう一度見渡したがやはり母の姿はなかった。「祖母になにかあったのではないか。」胸さわぎがした。不安と緊張で涙があふれそうになったが、それを振り払うように大きな声で歌った。気づかず握りしめていた手は汗でぬれていた。

不安な気持ちのまま急いで家に帰ると、母は家にいた。明るい声で、

「ごめんね、見に行けなくて。手術が予定より長引いて、でも手術は無事成功したよ。」

私は一気に体の力が抜けた。なんでも、手術中にクリップで止める胆のう管が、普通の人はボールペンの芯ほどの太さなのだが、祖母はボールペン本体ほどの太さもあり、時間がかかったそうだ。

「なにそれ。」

私と母は大笑いした。笑っているのに涙があふれて止まらなかった。

日記を読み返してみると、薄れていた当時の記憶や感情が鮮明に思い出された。いつもの日常が一変する怖さや、祖母への愛や感謝の気持ちに改めて気づき、一日一日を大切に過ごしていこうと感じた。

最近の日記は、受験に対する不安や将来の夢についての内容が中心となって書かれている。これから先も私は、日記を書き続けようと思う。そしてまた何年後かに読み返してみよう。また、大切なものに気づくことがあるはずだから。